ルル 追加 HO B 夕食を食べ、お風呂に入った私は自室へ戻った。 部屋に入ったとき、なにか――小さな違和感を覚える。 目を凝らしたけれど、なにも変わらない私の部屋。 今日は泣いてしまって目の奥が痛いし、暑い中歩き回ってへとへと だから、きっと気のせいだろう。

## 「『俺がいる』か……」

私はツバメが来てからもずっと、どこかに孤独を感じていた。 両親がいないことを、受け止めきれていなかった。 そして、万能薬のこと。 ひとりで抱えるにはやはり、重たすぎると感じている自分がいることに、気づいてしまった。 けれど、誰にも、ツバメにも、話すことはできない。 それがまた、孤独を呼んだ。

——私はこのままずっと、独りぼっちだ。

そう思ったとき、ツバメが触れてくれたときの温度を思い出す。 私よりもあたたかい手。

涙を拭う手を止めてくれた彼に、胸の奥からじんわりと気持ちが込 みあげてくる。

これは――。

彼が私の髪に触れた、その瞬間、時間がゆっくりになった。 彼の仕草ひとつひとつが目に焼きつくような……。

会ったときは、彼の笑顔の奥が見えないと感じていたのに、今はその笑顔の奥に優しさを見い出している自分がいる。 フォルへのプレゼントのときも、今日の出来事も。 彼の優しさに触れるたびに、彼の印象が変わっていって。 それが私に向けられたとき、心が震えて、うれしくて――甘えたくなってしまう。

「あれ、私……」

なにを考えているんだろう。 心臓がどんどん早くなっていく。 体の熱がどんどんあがっていく。 その感情を抱くにはきっと、まだ早くて。 でも、たしかに、芽生えた小さな恋心を自覚した。